

今日の福音書はイエス様が十字架に架けられる前の晩、御自分がこの世を去った後のことを考え、聖霊が弟子たちと共にいて導いてくれることの約束を語られたところです。今日のところで、私がとても印象深く思ったのは、イエス様が弟子たちを「あなたがた」と呼び、それと対照的なものとして「世」という言葉を使っている点です。

『14:17 この方は（これは聖霊のことですが）、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。』

『14:19 しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。』

今日のところでイエス様は聖霊を与える約束をされるのですが、聖霊のことを、「別の弁護者」とか「真理の霊」という表現で説明されています。その聖霊を『世』は知らないけれど、『あなたがた・弟子たち』は、その聖霊を知っている。そして、しばらくするとイエス様のことを、『世』は見なくなるが、『あなたがた・弟子たち』はその霊の助けによって、イエス様を見ることができる、というわけです。

私は、弟子たちと対比して書かれているこの「世」というものについて、具体的に何を指しているのか、気になりました。そして、調べてみようとする、4つの福音書に「世」という言葉が何回出てくるか、調べた人がいました。そして、面白い数字を紹介していました。

「世」と訳された元のギリシャ語は「コスモス」なのですが、マタイで9回。マルコとルカはそれぞれ3回なのに対して、ヨハネによる福音書では、77回も出てくる。そしてヨハネの3つの手紙にも24回出てくるから、これらの著者であるヨハネは「世」という言葉を101回も使っているのです。

ヨハネによる福音書は最初から、言がこの世に来たけど、世は彼を受け入れなかった、などの聖句が次々出てきますし、「わたしは世の光である」など、世という言葉は多く頭に浮かびます。

さて、この「世」という言葉の使い方を私たちはどのようにとらえたらいいのか、「世」という言葉を数えた人が、ホームページで紹介していたので関心を持って読んだのですが、その人によると、それは1枚の絵から想像することができる、と説明していました。

福音書の中には「突風を静める」という出来事が、マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書に出てきます。ガリラヤ湖でイエス様が弟子たちと舟に乗っているのですが、急に突風が吹いて、弟子たちが眠っているイエス様を起こすと、イエス様は風を叱って、湖に「黙れ。静まれ」と言われた話です。

皆さんは、聖歌525番「世の波さわげど み声静かに われに従えと イエス呼びたもう」という歌を歌った頃がおありでしょう。それと関連のある絵も見たことがあるのではないのでしょうか。

聖書では「海」とか「湖」が、しばしば「世」の象徴として使われます。ヨハネによる福音書が「世」という言葉を多く使うのに対して、他の福音書は、弟子たちの舟を襲う荒波の形で、「弟子たち」と「世」を対比しているように私には思えます。そして、波の上で揺れている舟は、キリストの教会を象徴すると言われています。舟は、世の波に吞まれそうになりますが、弟子たちの声に起こされて、イエス様は風を叱って、大なぎにしたのです。

湖にしても、海にしても、荒波の前に、人間は無力です。湖や海が「世」を象徴しているなら、「世」とは、人間の力ではコントロールできない勢力ということになります。そんな恐ろしい湖のような「世」に、イエス様は弟子たちを残して、去って行かれます。ですから、残された弟子たちが荒波に吞まれないように、聖霊が来ることをイエス様は約束してくださっているのです。

このあと、実際にイエス様が十字架に架けられ、やがて天に昇られた後、弟子たちは聖霊に勇気づけられて、迫害にも負けず、世界に宣教してゆきました。

さて、それでは、現代において、弟子たちの後継者である私たちが、この世の荒波の中で信仰を守ってゆく、というのは、どういうことなのでしょうか。

私はこの世の荒波、というのは、最初の教会が受けたような迫害が起こることではないと思います。そうではなく、信仰の自由が認められた現代においては、私たちの信仰の内容が曖昧なままほっておかれて、クリスチャンやその集団である教会の目的を見失うことに大きな危険があるように思います。それは、具体的な形としては、私たちが大切に守っている聖餐式自体が、曖昧な定義で、信仰の内容が空洞化していることなどに、現れているのではないのでしょうか。

数年前から、日本聖公会では、洗礼を受けた人には、堅信式を受領する前から、ある程度の勉強をして準備ができていれば、聖餐を受けることができるようになりました。「堅信前の陪餐」など皆さんも学習されたでしょう。これは、キリスト教の世界を見回せば、当たり前のことです。

カトリックも洗礼を受けた人は、幼児洗礼であっても小学校の低学年で陪餐しているし、堅信式というのは、聖餐とは直接関係がありません。また、プロテスタントの教派では聖公会のような主教は存在しませんから、洗礼を受けたら、陪餐するのは当然のことです。今さら言わなくてもよさそうなものです。

そんなことよりも、日本基督教団などでは、「未だ洗礼を受けていない人に、聖餐を受けさせることはできないか。」ということが議論の中心です。私も、そちらの方に関心があって、「なぜ未受洗者の陪餐は許されないのか」という本を読んだことがあります。

この問題には、多くのことが関連していて、簡単に結論を出せることではないのですが、これは決して、誰でも教会に来たら、陪餐させていいではないか、という話ではありません。他の宗教や無神論者でもいいんだ、というわけではありません。信仰を持って教会に来ているが、未だ洗礼を受けていない、という人の場合、陪餐を許可してもいいのではないか、という問題だと、説明していました。だから、洗礼が問題なのではなく、信仰の有る無しが問題だというわけです。

その人たちに言わせると、「洗礼を受けていない人が陪餐できない、というのは、差別ではないか。」という主張です。聖餐式が最初に行なわれたのは、イエス様が十字架に架けられる前夜、最後の晩餐の時でした。あの時には、イエス様を裏切ったイスカリオテのユダさえ、パンとブドウ酒を受けているのだから、まして、求道中の未受洗者に陪餐を許すのは、当然ではないか。そして、洗礼を受けていない者が聖餐を受けてはいけない、という聖書の箇所はない、というわけです。

コリントの信徒への手紙一 11章では、ちゃんと準備しないで、ふさわしくないまま、主の晩餐にあずかってはいけない、とパウロは言いますが、陪餐に関して、洗礼の有無については論じていません。

しかしこのような、未受洗者への陪餐ということへの、反対の立場からの批判は、こういうことです。

「信仰というのは、最近教会に来た人の中にも、熱心な人がいるかと思えば、長年教会に来ていても、信仰の理解が進んでいない人もいるだろう。一人ひとりの信仰を、その人には信仰があるとかないとか、客観的に判定などできないではないか。しかし『洗礼を受けている、』という基準があれば、その人に聖餐を与えることは、問題がない。陪餐したければ、洗礼を受ければいいのであって、差別しているわけではない。反対に、誰にでも聖餐を与えることになると、洗礼の意味がなくなる。」というような主張でした。教会の中に、けじめ、秩序などのことがおろそかにされることに危機感を感じているようです。イスカリオテのユダも洗礼を受けていたはずだから陪餐できた、というわけです。

ここまで、このような話をしてきたのは、聖公会の「堅信前の陪餐」の問題にしる、日本基督教団の「未受洗者の陪餐」の問題にしる、聖餐を許可された者と、許可されない者との間には、ハッキリした違いを示そうとしているように思えたからです。

宗教の自由が言われる現在、キリスト教信仰への迫害は、イスラム国の暴行は例外として、私たちが世の荒波に呑みこまれるようなことはないでしょう。しかし、私たちの中にある教会への熱心さ。何とか陪餐者を増やしたい、ということから、聖餐式を、安易な単なる交わりの食事として、その聖なることを希薄にしてしまう。そこにこそ私たちの信仰が荒波に呑み込まれる危機があるように思います。

私たちには、クリスチャンではない人々を差別する気持ちはないでしょう。しかし、私たちに命じられた目的を忘れることがないように、はっきりした使命を確認する必要があります。この世と私たちは、ともに神様によってつくられました。それを造られた時、それは良いものでした。ところが、神様の事を忘れて、知らないうちに人が人を支配したり、人よりもモノの方が大切になったりして、多くの人が苦しんでいるのは、聖書が書かれた時代だけではありません。私たちはこの30年の日本のありさまからも、人が疎かにされていることを痛感します。それを本来の形に戻すのです。

主の祈りの中で「御心が天で行われるとおりに、地にも行われますように。」と唱えているのは、それを指しているのです。私たちに与えられている目的を忘れないようにしましょう。

今日は、「あなたがた・弟子たち」と「世」を対照的に語られたイエス様の言葉から、現代の荒波に対して、どう生きてゆくのか、ということを考えてみました。